

【原著】

王妃ガートルード、悲劇『ハムレット』より(2)

——脆きもの、汝の名は女なり——

三 戸 祥 子

Queen Gertrude, from *The Tragedy of Hamlet, Prince of Denmark* (2)

——Frailty, thy Name is Woman——

Sachiko Mito

第三章 執拗な王妃の誓い — 誓いを違えるものに災いあれ

第一幕において、ハムレット父子はそれぞれに、母を、妻を激しく、かつ厳しく糾弾しながら、他方、その脆き女、美德の鑑を自ら穢した女に対して寛大な一面を露呈させたのであった。果たして、そのことを自ら気付いていたか否かは判然としないが、ハムレットは決して母を赦すほどに寛大というわけではなかった。第三幕第二場、芝居の場において執拗なまで母に対して皮肉の矢を放つ。その意図はどこにあったのか。

いうまでもなく、この場の主眼はよく知られた、かの劇中劇であり、その仕組まれた劇中劇によって、父・幽霊の告げた王位篡奪の血塗られた物語が確かな事実であることが衆目に暴露されることにある。ただし、ここで注目しようとするのは、クローディアスの露呈する馬脚ではなく、ガートルードの心理である。それを窺い知るには、ハムレットから陰に陽に母に向けられる含みある言葉が鍵となる。

ハムレットは、クローディアスの大罪——兄殺し、王殺しによる王位篡奪という大罪の確かな証をその目で確かめようと一計を案じる。それは、第二幕第二場、旅役者の一行がデンマーク王国の城に到着したことに端を発するひとつの賭けであった。その賭けとは、第三幕第二場において、役者たちが御前にて上演する出し物『ゴンザーゴウ殺し』に種を仕掛けた罠……といっても、悪鬼を打つための罠ではあるが。この劇の中に、ある小芝居を仕込んでクローディアスの良心を生け捕ろうというわけである。無論のこと、役者たちには真意は語られず、ただ10数行ばかり台詞を加えた『ゴンザーゴウ殺し』を演じさせるだけである。この一芝居が謀反人・篡奪者の良心を射抜けば、すなわちこの賭けの勝利である。そして、狙い通りに敵は罠にかかって失態を演じる。新王の隠しおおせぬ狼狽、劇上演半ばでの茫然自失の退席のうちにこの場は終わるのである。

御前上演が予期せぬ形で散会となった直後、勝利感に昂揚するハムレットが「尻尾を掴んだぞ」とばかり、家臣ながら唯一人絶大の信頼を置くホレイシウに「見たか、確かに見てくれたか」と迫る如く訊く姿をみれば、「罠」の第一の狙いがクローディアスにあったことは疑いない。しかし、それだけであろうか？ ハムレットの狙いは、唯にこの篡奪者自身の馬脚にのみあったのであろうか。

御前で劇の上演が始まろうとして、王、王妃をはじめそれぞれに、宮廷内の観客たちが席を占めようと集まってくると、わが子に向かって王妃は、自分の傍に座を取るよう声をかける。それをやんわりと辞して、こともあろうに、あれほどに第三幕第一場、尼寺の場にて翻弄したはずのオフィーリアの傍に陣取り、かつその膝に頭（かしら）を休めて芝居見物に興じるのである。狂気の人ということで許される振る舞いということであろうか、ハムレット自身そうした衆人の心理は心得て、大いに活用するつもりであったろう。だが、真の狙いは、罪びとの抜かりない観察にあったはずである。

そして、罪びとのひとり、王妃（の反応）を意識したと思われる言葉に見られる特長は二点。ひとつは卑猥であること、いまひとつは女の愛への不信感である。そして卑猥な言葉の大半が散文で語られていることも、聞くものの注意を引く。

Queen. Come hither, my dear Hamlet, sit by me.
Hamlet. No, good mother; here's metal more attractive.
Polonius. [*To the King*] O, ho! do you mark that?
Hamlet. Lady, shall I lie in your lap?
[Lying down at Ophelia's feet.]
Ophelia. No, my lord.
Hamlet. I mean, my head upon your lap?
Ophelia. Ay, my lord.
Hamlet. Do you think I meant country matters?
Ophelia. I think nothing, my lord.
Hamlet. That's a fair thought to lie between maid' legs.
Ophelia. What is, my lord?
Hamlet. Nothing.

(Act III. ii. ll. 106~118)

拒まれた愛故に、狂気に至ったと推理したポーロニアスは、母の求めを拒んでオフィーリアの傍に座を占めようとする王子を見て、それ見たことかと得意の顔を王に向ける。引用文中で我々の注目するのは、その後の対話である（ll. 113~118）。対話はハムレットとオフィーリアの間に交わされているが、王子の言葉はすべて卑猥な含みを持たせたものである。「膝の間に横になってよろしいか」と聞かれて「否」と応えるオフィーリア。英語では‘lie in your lap’となっているため、性的な響きを聞き取って、彼女は相手が狂人と言えども心中驚いたに違いない。それを見て取った男は‘my head upon your lap’（l. 111）と言い換えて、もしや country matters（猥雑なこと）と勝手に早合点したか、とからかい気味に言葉を返す。なお困惑する乙女から「そんなこと、とんでもありませんわ、王子様」との答えを引き出すのである。さらに意地悪な言葉が返ってくるとは知らぬ乙女は憐れである。何故なら、残酷を承知で‘nothing’（l. 115）とは殊勝な心がけだとやり込めるからである。何が殊勝で乙女にふさわしいかといえ、maid's legs（l. 116）の間に何も持たぬ・・・一物など何も持とうなど思わぬ：nothing 故である。（注1）

この世の穢れとも、男女の欲情とも無縁とされるはずの乙女に向けられるこの卑猥さは、ある意味で酷い一面を持つが、ハムレットの意図は、単に、品位忘れし狂者故の戯言としてこの言葉を発することにあるわけではなかった。世慣れた大人を欺きつつ、彼らの心の深層を探る

うともしているのである。母ガートルードの反応には殊に注意を怠らなかったはずである。もはや殊勝なる乙女の貞節と無縁の女はいかに聞くか、この戯言・・・？

第一幕第五場において父王・幽霊の語った貞婦の墮落の図を払えぬ王子は、それを嫌悪しつつ、一方で奇妙に陽気ではしゃぎふざけて見せる。このとき、第三幕第一場で翻弄され困惑と絶望に襲われた乙女の心などかまう暇はなかった。

Ophelia. You are merry, my lord.

Hamlet. Who, I ?

Ophelia. Ay, my lord.

Hamlet. O God, your only jig-maker! What should a
man do but be merry? For look you how cheerfully my
mother looks, and my father died within's two hours.

Ophelia. Nay, 'tis twice two months, my lord.

Hamlet. So long? Nay then, let the devil wear black,
for I'll have a suit of sables. O heavens! die two months
ago, and not forgotten yet? Then there's hope a great
man's memory may outlive his life half a year;

(ActIII. ii. ll. 119~129)

ずいぶん機嫌がよいのですねとオフィーリアに言われ、狂言師よろしく陽気に人を笑わせるよりほかなかりうと応える。なにしろ、父が死んで僅か2時間というのに、ほれ、母上の楽しい様子はどうか。息子の自分が沈んでいてはなるまいとでも言うのか。これも明らかに忘却の母への当てこすりである。だが、正常なる精神を失ったものには許される行為となる。「いえ、(王が亡くなられてから) 4ヶ月になりましたよ」と訂正されようとかまわず、今度は、2ヶ月経ってなお忘れられておらぬとな?! と勝手に月日を変えて有り難がる始末。さらに、偉人ならば、半年は世人の記憶に留まる榮譽に預かることも夢でない、などと嘯く。すべては母の忘恩と忘愛を揶揄する言葉にほかならない。聞こえよがしに吐く言葉が、果たして目当ての母に届くか否か、神のみぞ知る。

やがて、劇の開始と前口上を告げるものが現れると、そこでまた、卑猥な言葉遊びを披瀝して真意を知らぬ乙女を苦しめる。

Ophelia. Will 'a tell us what this show meant?

Hamlet. Ay, or any show that you will show him. Be
not you asham'd to show, he'll not shame to tell you what
it means.

Ophelia. You are naught, you are naught. I'll mark the play.

(Act. III. ii. ll. 140~144)

劇 (show) の前口上を始めるのかと問う乙女に答えて、出し物の中身ばかりか、お前さんにその気——然るもの (show) を見せてやる気があれば、相手の男も恥じ入ることも忘れてそれ

が何かを教えてくれようさ、と王子。だが、不可解なことに、清純なる乙女のこの娘，showなる語にこめられた猥雑さを疑問の余地なく解している節がある。これをどう解すればよいのであろうか？ それとも、当時知らぬもののおらぬ卑猥な冗談，日常，深窓の乙女といえども耳にする機会のありうる言葉の二義と解すべきか。いわば，二義を弄ぶ男の冗談であったのか。その点については，ここでは深く追求しないでおく。（注2）

ここでも忘れてならないのは，誰を的にしたこの卑猥な言葉の二義を弄ぶ仕儀かということである。狙いは母，そしてその新夫にあった。聞き手をオフィーリアとして女一般の性的放縦を揶揄し，その実，母，そして王妃の体現する放縦をあげつらう。合わせて，その放縦に応えて恥じぬ男，叔父であり現王クローディアスにも言及する。ここにこそ，本意が潜むのだ。引用文中 ‘you’ (l. 141; 142) は一義的には対話の相手オフィーリアであるが，その実，女一般，そして母ガートルードを指している。そして，‘him’ (l. 141) 及び ‘he’ (l. 142) とは口上役の男でありつつ，実は王クローディアスを意味する人称代名詞である。この件（くだり）は，暗に，この不義と近親相姦の罪を恥じぬ男女の交わりに言及したものであったろう。酷いことではあったが，何ほどの罪も未だ犯さぬオフィーリアに，やがて堕ちゆく女の運めを見ずにおれぬハムレットでもあったか。それが返って目の前の乙女に対する残酷を生んだ。

さて，口上が終わると，その口上なるものの短さに乙女は ‘Tis brief, my lord’ と驚く。が，驚くに当たらぬとばかり，「短いのは女の愛とやらと変わらぬ」とハムレット。ここにも，母の儂くも消え去る愛を，堅く交わされたはずの愛の脆さを暗に指す響きをわれわれは聞く。一般の女の愛への不信に掛けて母を責めずにおれぬ心理が働いている。

こうして，手を変え，品を変え，ハムレットはオフィーリアの従順を利用して，母ガートルードへの当てこすりを続けていくが，いよいよ劇中劇『ゴンザーゴウ殺し』が始まり，佳境に入って劇中の王と王妃の交わす愛の誓いの場面となる。

Player King. *Our wills and fates do so contrary run
That our devices still are overthrown;
Our thoughts are ours, their ends none of our own.
So think thou wilt no second husband wed;
But die thy thoughts when thy first lord is dead.*

Player Queen. *Nor earth to me give food, nor heaven light,
Sport and repose lock from me day and night,
[To desperation turn my trust and hope,
An anchor's cheer in prison be my scope,]
Each opposite that blanks the face of joy
Meet what I would have well, and it destroy,
Both here and hence pursue me lasting strife,
If, once a widow, ever I be wife.*

(Act III. ii. ll. 209~221)

劇中王は，人というものはその望むところ [wills] と，（人の意志とは関わりなく）与えられた運め [fates] とは食い違い，意図したことは結局放棄されてしまうのが常なるものと言

う。それ故、今は二夫に見えずと誓ってくれようとも、この命——そなたの第一の夫の命果てれば、その誓いの言葉も死す定めにあると。反駁して王妃は、仮にも一旦夫を失ってなお人の妻となる日などあらば、ありとあらゆる不幸、禍がわが身に降りかかろうと厭わぬ、と天〔神〕の裁きを願う。その禍とは、現世のみならず死後までも王妃を追ってやむことなく苛む天罰なり。王は “Tis deeply sworn” (l. 223) と満足し、午後の仮眠に入る。

Player Queen.

Sleep rock thy brain,

And never come mischance between us twain.

[Exit

Hamlet.

Madam, how like you this play?

Queen.

The lady doth protest too much, methinks.

Hamlet.

O, but she'll keep her word.

(Act. III. ii. ll. 225~229)

劇中王の寝入ったことを確かめて退場する劇中王妃を横目に、「この劇、母上にはお気に召しましたか？」とハムレットが問う。ガートルードは返して、劇中の王妃はずいぶんと愛を誓ってくだすぎはせぬか、との返答。ああ、そのことなら、あの王妃、自分の口で誓った言葉、守りましょうほどに。当意即妙にハムレットは応じはするが、予期したのはそのような母の言葉ではあるまい。「夫亡き後、けっして新夫は取らぬ」と誓った劇中の王妃と自己を重ねて、内奥の疼きを感じはせぬか、そこが知りたいはずであつたろう。いわば肩透かしを食らった思いではなかったか、「誓いがくど過ぎる」などと、まるで人事ではないか・・・！ 胸の疼き (those thorns that in her bosom lodge / To prick and sting her; Act I. v. ll. 87~88) も、恥の萌芽も見当たらぬこの母。いかに解すべき？ 掛け値なしの忘却か。薄情か。それとも、骨の髄までの virtueならぬ lust の権化か。

婉曲なる母への攻撃はほとんど痛みを喚起せず、空を切る刀の如し、である。他方、この直後、毒殺の場面では、見事に叔父王、クローディアスの良心を吊り上げることに成功しはする。そして母はといえば、先王殺しの大罪には関知せぬ身であるらしいことが分かる。彼女は観劇半ば、王の異変に驚きはするが、新夫の驚愕と茫然自失を共有することはなかったのである。後、劇の改変が王子の手になるものと知って、王に代わる叱責役を引き受けるに過ぎぬ。

第三幕第二場、芝居の場でのハムレットは、狂人を装う利点（しかも母はそれ、狂気を信じた）を存分に生かして、卑猥な言葉を織り交ぜ、幾度となく母の内奥に迫ろうとするが、終わってみれば、その意図を遂げたとはいえぬ結末に至る。母ガートルードには、劇中の王妃が己を映す鏡となって迫り来る瞬間、偽誓の罪に慄く瞬間など決して訪れぬのであるから。しかも、大義のためといえ、オフィーリアの心を傷つけ、尼寺の場（第三幕第一场）では足りぬかというほどに、なお翻弄して、またもや捨て置くのである。罪が深いのは、誰かと問われかねまい。

（注3）第三者には分かりえぬ犠牲を強いての賭けではあつた。無論のこと、最重要事は見事に完遂するのではある。なにしろ、悪の権化、クローディアスの本性は引き出したのであるから。総じていえば、見事な賭けであつたといわねばなるまい。

第四章 糾弾の刃、母を射るか

第三幕第三場、旅役者演じる出し物が王の不興を買った咎を受けるべく、母・王妃の居室に急ぐハムレットは、その途上、礼拝堂で祈りを捧げる王の後姿を目にする。それを懺悔の祈りと早合点したばかりに復讐完遂の絶好の機会を逸することになるのである。懺悔して神の赦しを得んとするものを殺めれば、天国への道を開いてやるようなもの！ と、抜いた刀を鞘に納め、母の居室へと急ぐ。だが、その直後、王クロードィアスは諦念の嘆息を洩らし、立ち上がる。「心の伴わぬ祈り」それがこの男の祈りであった。‘My words fly up, my thoughts remain below. / Words without thoughts never to heaven go.’ (Act III. iii. ll. 97~98) 形ばかりの懺悔が神に届くはずもない、王は、現世の欲と野心を断ち切れぬ本姓を己の逃れられぬ運めと知ったのである。

さて、ハムレットがクロードィアスを礼拝堂に捨て置いて母の居室にやってくると、すぐにも母の叱責は始まる。だが、この居室の場における叱責とは、母の予期に反して、我が身に振り下ろされる叱責の刃に変容する。諫めんとしたそのわが子ハムレットが振り上げる容赦のない叱責の太刀である。しかもそれは、もはや糾弾、弾劾といってよい厳格な言葉の刃をもって女に迫った。尤も、王子が母の前に現れた直後は、単なる狂人の戯言と思われたのではあるが。

Enter HAMLET

Hamlet. Now, mother, what's the matter?
Queen. Hamlet, thou hast thy father much offended.
Hamlet. Mother, you have my father much offended.
Queen. Come, come, you answer with an idle tongue.
Hamlet. Go, go, you question with a wicked tongue.
Queen. Why, how now, Hamlet!
Hamlet. What's the matter now?
Queen. Have you forgot me?
Hamlet. No, by the rood, not so:
You are the Queen, your husband's brother's wife;
And —— would it were not so! —— you are my mother.
(Act III. iv. ll. 8~16)

第三幕第二場、芝居の場の余韻が残るのか、ハムレットは陽気なからかい気分で母を翻弄する。引用文中第2行～第5行はすべて、渋面をして諫めようとする母の言葉の揚げ足を取って茶化し、その氣勢を削ぐ応酬となっている。しかも、鋭く母の言葉を拒絶する意図が伝わる。第2行、王妃の thy father とはいふまでもなく継父クロードィアスを指すが、王子が my father と応じる「父」とは亡き父・先王をにおいて他にはない。母の言わんとする「父」が誰であるかを重々承知の上で、反発、拒絶するのである。「お前のお父上がとてもお腹立ちですよ」なんと無神経極まりない呼称か。故に、もはや心の中にさえ真の父を、真の夫を葬ってしまったこの女をして ‘you have my father much offended’ と揶揄し切り返すのである。神聖の愛を欺き、近親相姦の罪を冒してまでも再婚を果たして素知らぬ顔のこの女に、「あなたはかつての夫、私

の父を傷つけ穢し、その怒りを買った」のであると暗に責める。だが、予期したこととはいえ、母ガートルードには戯言 an idle answer (l. 4) としか響かぬ。「ふざけるのはおやめなさい」と制すれば、間髪を入れず、さあさあ、悪意のこもったひどい言葉 wicked tongue (l. 12) で詰問なさい、と応じるハムレット。ここにも、皮肉が響く。息子の言う my father が誰を指すのかも分からず、「訳の分からぬことを言って」などと、的外れな母に wickedness を見たとして、誰が彼を責められようか。

わが子の言葉の真意がつかめぬままに、はぐらかされるばかりの母はついに、生母さえ見分けがつかぬまでに呆けたか、とわが子を見張る。「いえいえ、分かりますとも」——神賭けて間違ふことなきデンマーク王国王妃、我が父の弟君の妻であらせられる。そして、嗚呼、願わくばそうでなければ、と念じずにおれませぬが……あなた様は我が母君。

ここにいたっては我慢ならず、狂人とはいえ侮辱を受けたと感じて母は人を呼ぶ。だが、またしても、王子の言葉には真意がこもっていた。‘would it were not so —— you are my mother’ (l. 16) それは、第一幕第二場の第一独白、己の肉体を疎ましく思い、死を願ったあの折の心境そのままに、相反する心の葛藤が言わせしめた言葉に他ならない。そして母には届かぬ言葉。

Queen. Nay then, I'll set those to you that can speak.
Hamlet. Come, come, and sit you down; you shall not budge.
You go not till I set you up a glass
Where you may see the inmost part of you.
Queen. What wilt thou do? Thou wilt not murder me?
Help, help, ho!

(Act III. iv. ll. 17-22)

私とは真面目に話せぬなら、「人を呼ぶ」と立ちかける母を制して、「鏡」を掲げてあなたの「心の奥」を映し、ご自身でその奥深くをご覧いただかねば、と迫る。引用文中 inmost part of you (l. 20) とは、先夫の死に流した涙も枯れぬうち、新たな求愛に我が身を掬われ嘆きも忘却の淵に沈ませた、その半身である。王妃の衣、王妃の冠、その美の顔（かんばせ）、その笑みに隠れた本性は何ぞ？ 覗きしてみるがよい。素知らぬ振りをして新王に手を、腰を取られて城中を歩く女、目を瞑って見えぬ振りをするものが何であるか、篤と知れ。(注4) 王子は、母に自己の冒した過ちを知り、自ら正して欲しいのである。またとない機会、母と子——二人きりである。だがやはり、母にはただの気のふれた男としか映らぬ。狂人は、王子は、わが子といえども恐ろしき存在、遠ざけるよりない。迫り来る王子に身の危険を感じた王妃は助けを呼ぶ。悲しや／哀しや、王子。

Polonius. [Behind] What, ho! help, help, help!
Hamlet. [Draws] How now! a rat?
Dead, for a ducat, dead! [Kills Polonius with a pass
through the arras.
Polonius. [Behind] O, I am slain!
Queen. O me, what hast thou done!
Hamlet. Nay, I know not:

Is it the King?

Queen. O, what a rash and bloody deed is this!

Hamlet. A bloody deed! —— almost as bad, good mother,
As kill a king and marry his brother.

Queen. As kill a king?

Hamlet. Ay, lady, it was my word.

[Parting the arras.

(Act III. iv. ll. 23-32)

王妃の叫び声に驚き慌てふためいたポローニアスは、物陰から叫び声をあげる。第三幕第一場、尼寺の場と同様、潜んで王子ハムレットの言動を監視しようと、間仕切りのカーテンの陰に隠れ、聞き耳を立てていたのである。王妃に唱和するかのような叫び help, help (l. 23) の声に、果たして潜んでおったかとばかり、刃をばカーテン越しに突き刺す。電光石火の如き迅速。迷いなく刀を抜き、何者であるかを確かめることなく刺し貫くその速さに誰も目を奪われよう。王妃の居室である。その陰にこそそそと隠れる rat は王か——まさに「正義の刃下す瞬間」であつたはず。だが皮肉なことに、それは王子の愛した乙女オフィーリアの父であつた。そして、彼の非業の死は後、彼女の死の一因となる。

ここで注目したいのは、死者が誰であるかよりも、「なんと恐ろしき、短慮」と恐れ慄く母に反駁するハムレットの言葉である。ガートルードの bloody deed (l. 28) というその言葉に鋭く反応して、私の今の行いが bloody deed と咎めを受けるなら、「血生臭さ」において変わりはせぬとばかり、母の再婚に一太刀浴びせるのである。王をひとり殺めておいて、その弟と結婚に及ぶことは紛れもなく同等の bloody deed ではないか?! 引用文では、不定冠詞を用いて as bad.../As kill a king (ll. 30-31) とし、一般の話、譬えとして比較が為されているが、真意は目の前の女、デンマーク王妃の仕儀に触れることにある。しかも、見逃してならないのは、忘却という方法によって、第一の夫を葬り去ることを暗に言う kill であるのみならず、未だ完全には晴れぬ疑いをここに再燃させて、肉体の命をも奪いし大罪——王殺しの罪——を問いただしてもいることである。実に際どいハムレットの反駁ではある。当然の如く「王殺し(と変わらぬ)、と?」と思いがけぬ咎めに王妃は色を変える。おそらく、このとき王子は、母・王妃の目を見据えて「そうです、そう申し上げたのです」と、母の声に、目に、偽りの色が映りはせぬかと瞬きもせず凝視するに違いない。空とぼけた As kill a king? (l. 32) と響いたなら、何とすればよいのか?

母を見据えたまま、カーテンを引いてみれば、物陰に潜んだのは、王ならぬ腰ぎんちゃくよろしく權威に諂う重臣ポローニアスであつた。情けのひとつも見せず、息絶えた死者を打つ如く、この老人を蔑して止まぬハムレットであるが、王子の今の関心事は母にある。むしろ邪魔立てするものの退散は好都合であつたろう。いまこそ、存分に「鏡」を掲げて母を正気に立ち返らせねばならぬ。居室に唯二人、千載一遇の好機である。

Hamlet.

Peace; sit you down,

And let me wring your heart; for so I shall,

If it be made of penetrable stuff;

If damned custom have not braz'd it so

That it be proof and bulwark against sense.
Queen. What have I done that thou dar'st wag thy tongue
In noise so rude against me?
(Act III. iv. ll. 36-42)

引用文の冒頭、‘Peace; sit you down’ この言葉を皮切りに、以下、二人の対話の流れを定める主導権はハムレットの手中に移っていくのが分かる。この件（くだり）ばかりではない、この後の居室の場のすべての対話がそうである。

静かにして（黙って）お座りなさいと切り出したハムレットは、感じる心、人としての情（じょう）というものを未だ備え、そこを打てば響く糸をすっかり萎えさせていぬものなら、そのあなたの心を開けたいと言う。こじ開けることになるやも知れぬが、必ずや開けてみせると。呪うべき習慣とやらが情を鈍らせ、心を堅くなにしていなければ……。呪うべき習慣 *damned custom* (l. 39) とは、先王急逝の悲しみを忘れさせた新たな求愛と結婚の営みを指すと考えてよからう。この習慣こそはハムレットの父を、その聖なる愛を忘れさせ、神をも畏れさせぬ憎むべき *custom* であった。まさしく、容易なことではなかった。母の心はその子の予期し恐れた通り、僅かふた月に関わらず、早や ‘*damned custom*’ を不倒の要塞 *bulwark* (l. 40) として揺らがず、内側を覗かせる気配を見せなかったのである。「一体、このわたくしが何をしたと言うのです？」母はむしろ、王妃である母に向かって、許されぬ無礼を働く者として王子叱責に転じようとする。大声で喚き、暗に、あらぬ母の罪を問うとは何事か—— ‘*dar'st wag thy tongue / In noise so rude*’ ——相手の非礼、品位の欠落を蔑んだこの言葉の用いよう、そこには、攻撃的な舌を持つ相手の退却を促そうとする必死の抵抗が窺える。確かに不遜な所業ではあった。だが、怯むハムレットではない。覚悟あつての不遜である。

Queen. What have I done that thou dar'st wag thy tongue
In noise so rude against me?
Hamlet. Such an act
That blurs the grace and blush of modesty;
Calls virtue hypocrite; takes off the rose
From the fair forehead of an innocent love,
And sets a blister there; makes marriage-vows
As false as dicers' oaths. O, such a deed
As from the body of contraction plucks
The very soul, and sweet religion makes
A rhapsody of words. Heaven's face does glow
O'er this solidity and compound mass
With heated visage, as against the doom ——
Is thought-sick at the act.
(Act III. iv. ll. 41-53)

ハムレットは、自責の念を一片として見せぬ母に向かって厳しい裁定を下す。あなたの為したことは天上界の神（Heaven;l. 50 は God の意）を怒らせ恥じ入らせる行いであると。何故か？「貞節」という美德を辱めたが故である。引用文中第3行目 *modesty* とは、婚前の乙女な

らば chastity と呼ばれる女の唯一絶対の美德を指す言葉であり、第4行目で virtue と表わされている。(注5) この「美德の鑑」と信じられたガートルードは自らその鑑を穢した。その穢れの元はなにか。ハムレットの父と神聖なる愛の誓いを忘れ去ったかのような早すぎる再婚、しかも神も法も世の慣習も許さぬ近親相姦の罪なる結婚、真の雄雄しき男と唾棄すべき男の見分けも付かぬ愚かしき情欲の盲目・・・これらすべてが汚点となり、美德の鑑は曇り穢されたのだ。清らであった愛の真白き額には淫乱の焼印が押され、神前に額ずき交わした結婚の誓い marriage-vows (l. 46) は当てにならぬ賭け事使の空約束 dicer's oaths (l. 47) に墮してしまった。嗚呼、母の爲したことをみよ、「美德」とは偽善の別名に過ぎぬ！

しかし、こうした抽象的な言葉、比喻を用いた言葉による非難・糾弾は、いかに的を射たものであれ、ガートルードを目覚めさせることはできない。「我誤まてり」の自覚を促すことはできないのである。またしても、一体何をしようというのです？ と不満の声をあげて抗弁する母である。

Queen. Ay me, what act,
That roars so loud and thunders in the index?
Hamlet. Look here upon this picture and on this,
The counterfeit presentment of two brothers.
See what a grace was seated on this brow;
Hyperion's curls; the front of Jove himself;
An eye like Mars, to threaten and command;
A station like the herald Mercury
New lighted on a heaven-kissing hill ——
A combination and a form indeed
Where every god did seem to set his seal,
To give the world assurance of a man.
This was your husband. Look you now what follows:
Here is your husband, like a mildew'd ear
Blasting his wholesome brother. Have you eyes?
Could you on this fair mountain leave to feed,
And batten on this moor? Ha! Have you eyes?
(Act III. iv. ll. 53-69)

つい先刻とまったくと言ってよいほど変わらぬ反応を見せるガートルードである。

相手が声を荒げ、雷を思わせる怒声を響かせることをここでも諫めて、自分に向けられた非難を故なきこと Ay me, what act..... と退けようとする。その言葉には、声高に物言う王子を責める節も窺える。だが、ハムレットに退却はない。母の心を動かすには、抽象の言葉では通用せぬと知るや、今度は徹底して具体的対比を武器として難攻不落に見える damned custom (l. 39) に切り込もうとする。情眠を解くには、肌に痛みを感じる鉄拳である。

「見よ、この二つの肖像を」とばかり差し示すのは、己が胸にかかる首飾りに収めた父の肖像と母の胸に掛かる現夫の肖像。引用文中第3行目 this picture とは父王の顔、そして、続く this とは叔父・現王の顔を指す。(まさしく、父は死と共に母の記憶から葬り去られてしまった！——女の胸にもはや占める座を持たぬことが何よりの証し) 今こそ、はっきりと目に映る

絵を突きつけ、母の心を揺るがしてみせようぞ。亡き父王と叔父・現王とを徹底して比較し、その違いを、相容れぬ違いを知らしめるのだ。比べるにも同一の尺度を用いることなど拒むほどの隔たりである。女のかつての夫は、ギリシアの正統なる神々に準えられる気高き資質の人として描かれ——実に、その描写たるや8行に及ぶ。太陽神ヘリオス (Hyperion; l. 58) に始まり、ギリシア神話の神々、オリュンポス神の頂点に立つゼウス (Jove; l. 58)、更にその直系の血を引く軍神アレス (Mars; l. 59)、ゼウスの使者も務める有翼のサンダルを履く道祖神ヘルメス (Mercury; l. 60) と、先王の資質が常人を遥かに超える雄雄しく貴きものであることが強調されていく。王子ハムレットにとって、亡き父とは理想の男の姿そのものであった。天界の神々に比すべき高き／貴き偉大なる父・王像をもって描くより他にすべがあるか。(注6)

代わって、その義弟とはいえ、僅か1行余りの形容を与えられるに過ぎない。しかもすべて命枯らす黴として描かれるのである。引用文第13行目 ‘a mildew'd ear’ (黴蔓延る麦穂) とはクロードィアス、母にとっての「今のあなたの夫」、この黴臭き麦穂はその黴——悪徳により、先王、母にとっての「かつてのあなたの夫」の愛を、徳を穢し、デンマーク国を汚す——のである。嗚呼、この美しき名峰と不毛の荒野 (this fair mountain; this moor; ll. 68-69)、その違いがあなたの眼には映らぬ！ 天と地ほどの相違も知らぬ母よ、あなたは盲しいた人か？

ハムレットは、引用文の末尾、二度までも ‘Have you eyes?’ と問う。反復して問わずにおれぬその声。そこに、真実を見る目を持たぬ母に対する信じがたき思いと怒り、嘆き、悲しみのすべてが込められていよう。そして最終行の Have you eyes? には、その直前に Ha! の叫びが加わり、思わず洩らす嘆息にも似たその短い叫びがいつそうのやり切れなさ、悲しき憤激を響かせる。

何故に、母はこの間違いを、この見間違いようのない二人の男を、取り違える過ちを冒すか——何故に、善きもの、慈しみ尊ぶべきものを捨て、悪しきものを我が宝と拾うのか？ 両の目はあっても真実の見えぬ目。では何が、その目を曇らせたか？ これがハムレットの謎であり、問いであった。既に、女の不可解さについては、第一幕第一場、第一独白中の ‘Frailty, thy name is woman’ に、そして第一幕第五場、父王・幽霊の言葉 ‘lust’ が ‘garbage’ に惹かれることを説く言葉に、世の一般として語られてはいた。この居室の場では、女一般からガートルードという具体的な的を定めてその謎に迫ることになるのである。

Hamlet. You cannot call it love; for at your age
The heyday in the blood is tame, it's humble,
And waits upon the judgment; and what judgment
Would step from this to this? [Sense, sure, you have,
Else could you nor have motion; but sure that sense
Is apoplex'd; 中略a difference.] What devil was't
That thus hath cozen'd you at hoodman-blind?
[Eyes without feeling, 中略so mope]
O shame! where is thy blush?
(Act III. iv. ll. 70-79) (注7)

兄と弟、一方は神々に譬えられ、他方は麦穂を枯らす黴と貶められる。一方は神の住まう神聖の美峰、他方は省みられぬ不毛の地。それを見えぬ目に変容させるのは(まさか)熱き情欲

ではあるまい——ここでは引用文第1行目 love が第2行目 blood と同義、すなわち desire/lust の意で用いられている。何故とって、母の年齢に達すれば、もはや情欲の求めは和らぎ、節度あるものになるはずではないか。若き血潮の滾る時を過ごせば、その後は、人の本能は理性・分別 (judgement; l. 73—そして sense; l. 74, 75) に道を譲り、控えめに振舞うもの。仮にあなたにもその分別が備わるなら、一体どのような分別が教えて「こちら」を捨て、「こちら」にその身を委ねよと告げたのか？ (引用文第73行目、ふたつの this は言うまでもなく、はじめが亡き父、あとの this が叔父を指す。このときハムレットは、母と子がそれぞれの胸に掛かるあの二つの肖像画をここでも指差し、母の注意を促す) いやしかし、この理性・分別が麻痺してしまったのだ。麻痺をもたらしたのは、何処のどのような悪魔の仕業か？ 悪魔に騙され、目隠しをされたと思えぬではないか、そうした不可解さがハムレットの胸中にはあった。だが同時に、その悪魔の正体はすでに掴んでもいたのだ。

そうであるからこそ、引用文最終行 O shame! where is thy blush? という呻くような嘆きと詰問の声を上げるのである。それは暗に、母ガートルードがその悪魔に謀られ、自己が堅持すべき理性とあるべき分別を見失い、そして love/blood にその身を委ねたと判じた/談じたことを示していた。せめて恥ずべき心を持って、いや目覚めさせよとの思いは届くのか。ガートルードの内奥を揺るがすことはできるのか。

ハムレットは、いよいよ深く核心に触れ、母を追い詰めていく。尤もそれは、‘Forgive me for my virtue’ (l. 157) という言葉にあるように、決して好んで追い詰めるのではなかった。国を正し、母を諫め正すことに本意はあった。

Hamlet. Rebellious hell,
 If thou canst mutine in a matron's bones,
 To flaming youth let virtue be as wax
 And melt in her own fire; proclaim no shame
 When the compulsive ardour gives the charge,
 Since frost itself as actively doth burn,
 And reason panders will.

(Act III. iv. ll. 84-90)

引用文冒頭、‘Rebellious hell’ と呼びかけるのは、実体を持つ対象ではない。先の引用に言及した blood/love すなわち「情欲」という名の「荒れ狂う地獄」に他ならない。人の、いや女の？ 中に潜む本能、統御の効かぬ本能の力を言う。引用文中第2行目 a matron's bones とまたしても不定冠詞によって不特定の「中年の既婚婦人」を指す言葉を用いてはいるが、明らかにこの matron とは目の前のガートルードを名指したものである。[ハムレットのいわんとするのは、女の弱さを逆手にとって、優勢と思われた分別が本能の襲撃に見舞われたなら、いっそ屈するがよい。その敗北は恥じるに当たらぬ、ということである。だが、それは皮肉のこもった反語に他ならない。] ([] は筆者)

理性・分別が人の導き手となる年齢に至った者——女であれば matron と呼ばれることが似つかわしい年齢である——であれ、万一「情欲」の荒れ狂う嵐に見舞われたなら、貞節の美德などその情欲の炎に焼かれて溶けるに任せてしまうがよい。引用中の virtue はいまや炎を上げて焼き尽くすあの若き日の特権と思われた熱情 flaming youth に変容する。(l. 86) この変容

を起こさせたものこそ暗き力、あの悪魔の正体であった。ここに至っては、カートルードは a matron とは自身を指す言葉であることを否むことはできない。更に、bones が加わることによって、この 1 行 If thou canst mutine in a matron's bones は女の肉体の真髓、骨の髓までも揺るがす官能を想起させる言葉となり、聞き手ガートルードには残酷である。

だが、わが子は言葉を切らず、こう続ける。何の、恥じることがあろうか、抗しきれぬ激情 the compulsive ardour (l. 88) が襲い掛かるのである。溶かされぬ方が不思議というものであろう。なぜと言うに、理性は情欲に屈するもの。それにしても、何という比喻表現であらうか。とりわけ、引用文末尾の比喻表現は翻訳を拒む言葉となっている。拙い解説を敢えて試みるなら。。。その前に結論に少し説明を補っておきたい。抗しきれぬ熱情に人が、中年既婚の女性が襲われたなら、何が起こるか。もはや理性・分別 reason は本来の働きを失ってしまう。そして情欲 will を制御するのでなく、むしろ仲介者に (pander; l. 89 一文中では動詞) 成り果てる。

それをシェイクスピアは、非常に具象的な比喻を用いて、人というもの、ここでは matron と表された一人の女性、ガートルードが予期せぬ変化、変容に見舞われることを描いている。そこに、驚嘆を禁じ得ない。そこでは、ガートルード、そして中年既婚女性の肉体は frost 霜の如き触れれば凍てつく肌とされる、だがそれは眠った死火山が今日覚めたかのように、時として熱を帯び、若き日の、若き者の熱情に等しく燃え立つ。一旦燃え立てば、理性は情欲の僕に転じ、もはや荒れ狂う情欲を鎮めることなどできようはずもない。(注：霜なる肌・肉体が内から熱を帯び溶ける様と、貞節なる美德が溶けて熱情・情欲に変じることとは呼応する)

それ故に 'proclaim no shame' と逆説的命令を下す。恥じることはない、また恥じることを求めるべくもない。のである。無論、それは反語である。鋭い皮肉の込められた反語にて、母を揺るがし、己の内奥を覗かせようとの意図である。

美德がいかに情欲に屈するかを説くハムレットの言葉は、鋭く、父・幽霊の言葉と一致呼応することに誰しも気付くであろうが、王子の比喻そのものには特有のものがあがり、より具象的で、それだけ母の堅き要塞を打ち崩す力を得たといえようか。

果たして母ガートルードが、この反語を反語として解したか否かは分からぬ。だが、確かに己の深淵を覗き見た。露わとなった心の奥底を。それ以上は見ると聞くも耐えられず、わが子を制してその言葉を遮ろうとする。が、攻撃の手は緩むことはない。

Queen.

O Hamlet, speak no more.

Thou turn'st my eyes into my very soul;
And there I see such black and grained spots
As will not leave their tinct.

Hamlet.

Nay, but to live

In the rank sweat of an enseamed bed,
Stew'd in corruption, honeying and making love
Over the nasty sty!

Queen.

O, speak to me no more!

These words like daggers enter in my ears;

No more, sweet Hamlet.

(Act III. iv. ll. 90~98)

ここに至って初めて母は陥落する。偽善の美德に塗り込められた鑑の内側は暴露され、黒々とした染みが姿を見せる。穢れた魂に我ながら恐れ戦慄き、「それ以上は触れてくれるな」と懇願する王妃に、相手の非礼を咎める先刻の威厳はない。陰を潜めたはずの熱情に揺るがされ virtue を [frost; l. 89を] 溶かし、理性・分別の手を振りほどいて will に己を委ねた matron とは、紛れもなく王妃自身を映す鏡。それを否む力はなかった。わが子ハムレットの言葉は、恐るべき真実となって我が胸を刺し貫いたのであった。

刺し抜く言葉の痛みに耐えられぬと訴える母ガートルードに哀れを感じて退くのかと言えば、さにあらず。ハムレットは更に、目の前の女 matron が、己が身を委ねた熱情、抗し得なかった compulsive ardour (l. 88) に導かれた果てにあるものが、いかなる境涯か描いてみせる。亡き王を忘却の淵に沈ませ、神聖の愛を欺いて手にした新たな愛は、もはや人の愛ではない。腐臭と汚物に満ちた「豚小屋」the nasty sty (l. 96) での営みに成り果てる。王妃の迎えた第二の夫クロードィアスから得るのは汚辱の愛である。何故か。引用文第6行目 corruption の一語がすべてを物語る。「腐敗」とは罪の別名であり、新王と王妃の愛は罪に塗れた愛に他ならない。それは、男にとっては王殺しと近親相姦という大罪の果てに手中にしたものであり、女にとっては、早すぎる愛の忘却、美德の放擲と引き換えに得た快樂——そのすべては情欲の求めに屈した報い——である。尤も、ガートルードには、この corruption という語は、単に自身の貞節への裏切り（情欲に屈した）を指す言葉と聞こえたであろう。王殺しの罪はおそらく関知せぬことであった——第三幕第二場、芝居の場で確かめられていた故。

ガートルードが嬉々として向かうのは、enseamed bed (l. 94) それは心の愛も愛の誓いの意味も知らぬ、唯に、欲情という名の本能のみを主（あるじ）とする畜生の小屋，the nasty sty であった。そこに身を浴して平然と顔をあげる母、想像するだに厭わしいハムレットであった。この場に用いる比喩表現は、第一幕第五場において父王・幽霊が garbage と称した（汚物を連想させる）あの言葉を思い起こさせるが、この比喩によって王妃は、その自己の内奥に潜む本姓を引き出されたばかりか、ここにこうして、情欲に耽溺する様を‘畜生の営み’とまで唾棄し、糾弾されてはもはや息も絶えんばかり、お前のその言葉、私の胸刺し貫く「短刀」と苦痛の叫びを挙げる。

しかし、ハムレットは怯まず突き進む。いや、母の「短刀／dagger」という言葉によって連想を呼び起こされたかのように、murderer そして villain という言葉が口をついて出る。汚辱と罪の愛を共に分かち男の本性を知らぬままに、我が母はその身を委ねた。それ故にこそ、ハムレットは、母の眼前に男の正体を突きつけねばならない。

Queen.

O, speak no more!

These words like daggers enter in my ears;

No more, sweet Hamlet.

Hamlet.

A murderer and villain!

A slave that is not twentieth part the tithe

Of your precedent lord; A vice of kings;

A cutpurse of the empire and the rule,

That from a shelf the precious diadem stole
And put it in his pocket!

Queen. No more!

(Act III. iv. ll. 96-104)

一見、唐突に見えるが、言葉が言葉の連想を生んだのである。母その人を攻め、その穢された美德、情欲という深く潜む本性に屈した貞節を糾弾すべく詰め寄り、退路を経つハムレットであったが、その言葉の放つ矢の向かう先は、つと方角を変え、一挙に、この母を狂わせ、美德の鑑を放擲させしめた元凶の的目指して翔ける。

そうだ、突き刺し殺めたのだ、殺人者め、謀反人め！ 女の発した dagger なる語は押し隠したその言葉を留めるとまなく、王子の唇を突き破って放たれる。現実の暗殺は毒殺であった、だが、そんなことは問題ではない。理不尽の命の篡奪が問題なのであり、dagger という語の生む鋭い死の連想がハムレットを揺るがした。揺るがされた心は A murderer and a villain と叫ばせる。この murderer/villain が誰を指すかは、次の 2 行ですぐと分かる。不定冠詞を付してはいるが、すべて唯一の男、亡き父の弟クローディアスを指すは明らか。続く第 6 行以下にある cutpurse も然りである。「あなたの前夫」の足元にも及ばぬあの男、奴隷に等しい卑しき男。王国と統治権を掠め取ったあの男、「こそ泥」のごとき卑しき盗人め、デンマーク王国の貴き王冠をば、人目を欺き、我が懐にしまい込んだのだ！

実に、核心に触れた罪の弾劾である。‘A murderer and a villain!’ ——王殺しの謀反を、しかも実弟による王の殺害を——血を血で汚す大罪である——暗示する言葉を口にした瞬間であった。この言葉の後で、母が主人と仕えた先の夫 your precedent lord (l. 100) と比較されるのは、その実弟、母にとっての義弟、そのほかに誰がしよう？ それならば、わが子の口をついた murderer そして villain とはその義弟……！ だが、母の耳にとっては、「こそ泥 cutpurse」に譬えられるその男が義弟、そして自分の選んだ第二の夫と暗に知れようと、murderer/villain なる語もはやり譬えに過ぎなかった。事実としての「王殺害」という謀反が行なわれたとは、しかも現夫の手で、それは信じるに恐ろしき想像であった。殺しは殺しでも、それは王妃の心の内から、記憶から、神の祝福を受けた愛、永遠の愛の誓いを交わした誠を消し去ること、よこしまな求愛と結婚を指す比喩の言葉でしかなかった。

王の不興を買った王子を諫める役目を帯びていたはずの王妃ガートルードは、思わぬ窮地に立たされ、自らが糾弾を受け、果ては、新夫クローディアスの弾劾までも一心に浴びることになったのである。

「もう、やめておくれ！」この救いのない叫び声を聞きつけ馳せたのは、何と、この世ならぬ先王・幽霊であった。その目的は嘗ての后を窮地から救うためである。なるほど、王子の復讐という大義の鈍った決意を諫めるためとは言うが、真意は后にあった。驚愕し、己が美德を穢した罪に慄く母の救い手となってやれと王子を諭す、その言葉が何よりの証し。(注 8)

Ghost. Do not forget; this visitation
Is but to whet thy almost blunted purpose.
But look, amazement on thy mother sits.
O, step between her and her fighting soul!
Conceit in weakest bodies strongest works.

Speak to her, Hamlet.

Hamlet. How is it with you, lady?

Queen. Alas, how is't with you,

That you do bend your eye on vacancy,

And with th'incorporal air do hold discourse?

(Act III. iv. ll. 115~121)

ハムレットの狂気は、既に第三幕第一場、尼寺の場において確認されている。王は別として、王妃はポーニアスの考えをおおむね受け入れ、まして伴狂の疑いなど持っていない。ここで、‘he's mad’ (l. 108) と叫ぶのは目の前にはっきりと狂人の振る舞いを目撃するがためである。また、ハムレットの復讐と国を正す大義の決意に迷いも退行も見えない。当人が ‘your tardy son’ と自身を呼び、母の変容と女への不信に襲われ絶望感に捕われる故の遅延を ‘laps'd in time and passion’ と嘆くことを額面通りに受けて、世に言う「優柔不断」の動かぬ証拠のごとくにすり込まれてはなるまい。心理的な遅延を感じてはいたかも知れぬが、現実には、苦悩とともに一步一步と大義遂行の瞬間に向かってハムレットは進んでいる。このタイミングでの先王・幽霊の登場の必然性が、遅々として進まぬ復讐を責めることにあると考えるには、不自然さが残る。

先王は、王妃が No more! と呻きの声を挙げたその瞬間に姿を見せたことを見逃してはならない。耐えがたき言葉を耳にしたまさにそのとき、あたかも、苦しみの中から救い上げるかのように不意に現れるのである。それはまた、王子がまさに王殺しに手を下した張本人（に攻撃的を定めた）の名を呼ばわろうとしたその瞬間でもあった。むしろ、ハムレットの言葉を遮ったのは先王自身と言えよう。そして、遮ったが故に、王妃は救われ、開放された。いつときであれ、息止まる苦境から逃れたのである。

そしてここから場面は急展開する。

止めを刺されんとする罪人が命拾いをしたごとくに、ガートルードは息を吹き返すのである。母は、徳の鑑を汚した不徳の罪を問われ speak no more! と叫ぶ女の顔から、狂気のわが子を鎮める母の顔に転じる。内奥の深淵を覗き見て苦痛の叫びを挙げた我が身はもはや幻か？ あらぬ方を凝視してあらぬ姿に語りかけ、ことばを交わすわが子。これこそ狂気。常人が狂人の意のままに心乱されてよいわけなどあるはずもない。「父上」の姿が見えぬのですか、ほれそこに。と訴えるわが子に「狂気」を確信する母は、あらぬものをあつかうかのように思わせるものは、その狂気 ecstasy (l. 143) 故と、今再び姿を現した父王・幽霊（もともと、母の目には映らぬ）に高ぶるハムレットの興奮を鎮めようとする。だが、この確信に満ちた態度がまたしても、わが子に反駁、反撃の烽火をあげさせる合図となるのである。但し、それは、先の激しい糾弾の言葉ではなく、説き聞かせる言葉、善に向かわせんと誤てる者の手を引く言葉である。

「狂気ですって！」とまずは正真正銘「正気」であることを訴え、狂人の語る言葉故、聞き過ぎ、信じるに足らぬと闇に葬って安堵してはならぬと諭す。罪の糾弾から悔い改めに導く諫めの言葉へと変容していく。

Hamlet.

Mother, for love of grace,

Lay not that flattereing unction to your soul,

That not your trespass but my madness speaks:

It will but skin and film the ulcerous place,
Whiles rank corruption, mining all within,
Infects unseen. Confess yourself to heaven;
Repent what's past; avoid what is to come;
And do not spread the compost on the weeds,
To make them ranker.

(Act III. iv. ll. 149~157)

引用文第4行目 the ulcerous place とは、膿を持つ傷口に譬えたガートルードの内面の傷、穢された美德を指す言葉である。そこに一時凌ぎの膏藥 unction を貼って傷を癒したつもりになってはならぬと息子は言う。その膏藥たるや、爛れた傷の表を塞ぐに過ぎず、内側は深く深く爛れが進行し、やがては骨の髄まで腐らせてしまう。何故というに、その膏藥、いかにも効き目がありそうで油断のならぬ誤魔化し（ごまかし）の膏藥に過ぎぬからだ。この、つい手を伸ばしたくなる膏藥 that flattering unction とは、次行の my madness を指す。すなわち、己の過ち your trespass に真の原因（爛れの原因）を求めず、己が息子の狂気（の語る戯言）に過ぎぬものとやり過ごせば、いつときは救われた気がするかも知れぬ。だが、罪と過ち——美德の穢れは消滅するはずもなく、目を塞いだがために、見えぬ深部に腐敗は広がり骨の髄を溶かすのである。そうであるが故に、救いは自らが神の前にて告白し、懺悔するより求めようはない。引用文第6行目 Confess yourself to heaven とはまさに亡き父が望んだことである。直接手を下さず、母の罪は神に委ねよ leave her to heave (Act I. v. l. 86) との願いに沿う言葉と言うべきであろう。

ハムレットは説く。過去を悔いて、この先（明日からの生）を改めよと。それが、第7行の簡潔な言葉のすべてである。悔いるべき過去 what's past とは、言うまでもなく冒した美德の罪を、そして避けるべき、忌むべき未来 what is to come とは、変わらぬ現在の継承を指す言葉であろう。神の信仰を捨てぬものならば誰しも知る罪の懺悔と悔い改めの行い。過去を悔い、今を捨てねば救いはない。今を温存すれば、その今は悪の肥やしとなってさらに蔓延る。この言葉の真摯な思いのこもる一語一語が、母の心に届いたか——嗚呼、ではこの私は何とすればよいのか？と問わせることになる。わが子に助け手を求めたのである。これもまた、父の願う step between her and her fighting soul (l. 116) に合致するものである。

「脆きもの」としての、女という存在の捉え方が、父から子へと共有、継承されているといっても、あながち的外れとは言えまい。そして、子たるハムレットは、この母の求めに応じて、より具体的に忠告し、いかに振舞うかを教え説く／諭すことになる。

Queen. O Hamlet, thou hast cleft my heart in twain.
Hamlet. O, throw away the worser part of it,
And live the purer with the other half.
Good night —— but go not to my uncle's bed;
Assume a virtue, if you have it not.
[That monster custom, who all sense doth eat,
Of habits devil, is angel yet in this,
That to the use of actions fair and good
He likewise gives a frock or livery

That aptly is put on.] Refrain to-night;
And that shall lend a kind of easiness
To the next abstinence;

(Act III. iv. ll. 161~172) (注 9)

狂気の語る戯言と退けて、仮染めの安堵を得てはならない、「美德の鑑」を穢したその咎から目を逸らさず、神の前での懺悔によって悔い改めの生を心がけるよう勧めるハムレットの言葉は、真実を突いたものであったのか、王妃は「私の心は真つ二つに引き裂かれてしまった」と偽りなく心情を吐露する。すかさず、それなら、悪しき心を捨てなさい、とハムレット。「残った心を抛り所に清く生きるのです。」

まさか、これで得心し、母の改心に望みを抱くほど事は単純でもなければ、この母の心がさほどに容易に変わるとは信じ難い。糾弾し、諫め、進言はしたものの、不安は拭えぬはず。ハムレットは退室しかけて振り返り、叔父の下へは行かぬようと釘を刺す。「(あなたの内に) 貞節の美德が早や失われていようとも、未だある振りをしてごらんなさい。」あらぬ美德をあるが如く振舞えとは?! それは、振りをしているうちにその反復がやがて板に付き、あたかも演じられた美德も本来の自己の本姓の如くなる故。常ならば、習慣 custom というやつこそは人の理性・分別を食い殺し、眠らせてしまう悪魔、今度はさに非ず——一転、天使となってくれよう。理性の力を振り切って情欲に我が身を委ねることを習慣化したガートルードは、ここでは逆手に取った習慣化を勧められる。好ましき習慣を演技として始めよというわけである。

「今夜一夜、控え、耐えて御覧なさい、明日はもっと楽になるはず」

果たして、王妃は己を侍し、貞節の美德たる‘振り’はできるのか?

Hamlet.

So again, good night.

I must be cruel only to be kind;
Thus bad begins and worse remains behind.
One word more, good lady.

Queen.

What shall I do?

Hamlet.

Not this, by no means, that I bid you do;
Let the bloat King tempt you again to bed;
Pinch wonton on your cheek; call you his mouse;
And let him, for a pair of reechy kesses,
Or paddling in your neck with his damn'd fingers,
Make you to ravel all this matter out,
That I essentially am not in madness,
But mad in craft. 'Twere good you let him know;
For who that's but a queen, fair, sober, wise,
Would from a paddock, from a bat, a gib,
Such dear concernings hide? Who would do so?
No, in despite of sense and secrecy,
Unpeg the basket on the house's top,
Let the bird fly, -----

(Act III. iv. ll. 182~199)

ハムレットは、母の決意など信じてはいないことがこの件（くだり）から明白となる。

こうして、自ら「狂気」を否定し、真摯に悔い改めを勧めはしたものの、母は、自己を強く持って美德に立ち返ることなど、いやその試みさえも、できようはずはない。それが疑いようのない現実、その現実が覆される望みは万が一にもあるまい。それどころか、この自己暴露と母の、叔父の糾弾・断罪、そして母への諫め——それはすべて、ハムレットの破滅への道しるべとなり得る。何故と問うまでもない、現王・叔父を前に母が秘密を守れようはずもないからである。第三幕第二場・芝居の場での失態はクローディアスにある意味で致命的な傷を負わせた。だが、王子と云えども、王への不敬は国外追放の格好の口実となり、さらに、ここ居室の場での対話のすべてを聞き出すことも可能となったのである。（結果として、居室に潜ませたポーニアスは果てたが、后自身から聞きだす道は残る）言ってみれば、ハムレットは、后を差し向けて王子の真意を探ろうとする叔父王の罠にかかったも等しい。そして、叔父・現王の思惑通りに王子は思いのたけを母に語ったのである。

だが、ハムレットが完全に無防備でいたわけではなかった。むしろ究極において警戒を解かなかった。

引用文中第3行目 bad とは母との対話——上記に触れた暴露、糾弾等——によって種まかれ芽吹いた悪しき事の前兆を指し、worse とは、その先に起こり得ると考えられる危機、ハムレットに振りかかる死の危機を指す。

用心せねばならない。退室しかけたハムレットは「もうひと言、母上」と引き返す。

何と、そのひと言とは、叔父の下へ馳せよというもの。つい先刻、今夜一夜控えることより始めよと言い聞かせたその言葉をたちまち覆すのである。愛撫、接吻を受け、愛称で呼ばれ、そのご褒美に応えて、このわたくしとのやり取りのすべてを教えてやれ、と。だが、この侮辱に等しい言葉（描写）にも、前言を翻す無責任をも、母は子を責めることはない。

なにしろ、美しく、正しく、冷静、賢明なる王妃にてあらせられる貴女様、故に、あの王に関わる大事を告げぬなどありえぬ愚かしきこと。（たとえ）叔父・現王が、人とは程遠い下らぬ輩、ひき蛙とも、蝙蝠とも、雄猫ともおよそ嫌われ者が同列に並ぶ輩——であれ、王は王、そして貴女の大切な方、その方の大事を隠しては置けぬ。それが懸命なる王妃の務め。「全部、ぶちまけておしまいなさい」「（あの子は）狂っているのではない、ただ狂った振りをしているのです」と。

Queen. Be thou assur'd, if words be made of breath
And breath of life, I have no life to breathe
What thou hast said to me.

Hamlet. I must to England; you know that?

Queen. Alack,
I had forgot. 'Tis so concluded on.

(Act III. iv. ll. 202~206) (注10)

しかし、母はどんなことがあってもそれは話さぬ、と応える。「お前がここでわたくしに言ったことは口が裂けても洩らしませぬ」この堅い約束がハムレットの心を解かせたか、警戒心を

緩めて、英国への出発が叔父・王によって定められたことに触れる。[そして懷から取り出したのは、王の極秘文書であった。秘かに摩り替えてハムレットが入手したものである。文書には、王子の暗殺命令が記されており、その命を帯びるのは学友、ギルドenstagとローゼンクラーツの二人である。] 但し、Folio 版では、この文書の中身までも母に明かす件（くだり）は削除されている。そこまで語れば、王妃は冷静ではおれず、現王には何も言わぬといった秘密は守れまい。不安と恐怖を隠しきれず、それを怪しまれて強いられて語ることになるであろう。さらに王子の許しを嘆願しかねまい。横たわるポーニアスへの皮肉を込めた手向けの言葉とともに、その亡骸を引いて退出する様を描くことでこの場を終える方が賢明（王子にとって）、かつ自然（劇作家にとって）であろうか。

いずれにしろ、ガートルードは第三幕第四場、いわば王妃自身にとっての危機的場面の最終場面において母たる自己を思い起こし、秘密の厳守という点において「母」の愛を迷いなく示すことになる。ただ、「一夜控えて始めるはずの」悔い改めについては何の確約も、決意も口にすることはない。

第五章 母の嘘と真 — 母の愛

第三章第四幕の終わり、王妃ガートルードはハムレットの佯狂も、母に浴びせた糾弾の言葉、叔父・現王による王位篡奪を弾劾する言葉も、一切漏らさぬとわが子に誓う。そしてそのとおり、自分に課したこの難題を遂げて見せる。

King. What, Gertrude? How does Hamlet?
Queen. Mad as the sea and wind, when both counted
 Which is the mightier. In his lawless fit,
 Behind the arras hearing something stir,
 Whips out his rapier, cries 'A rat, a rat!'
 And in this brainish apprehension kills
 The unseen good old man.
King. O heavy deed!
 It had been so with us had we been there.
 His liberty is full of threats to all ——
 To you yourself, to us, to every one.
 Alas, how shall this bloody deed be answer'd?
 (Act IV. i. ll. 6~16)

第四幕第一場の冒頭、ハムレットに対する叱責の首尾はどうかと王から質されて、王妃は「狂気」を強調する。荒れ狂う嵐、人の力では統御しきれぬ狂気の力をのみ伝えて、それ故に善良なる忠臣、老ポローニアスを殺めてしまった、と。王妃の居室の陰に潜んでいる（母子の対話に耳済ませていた）ところを「鼠め！」と刺し殺されたと聞かぬや、王は、自分が同じ場に居合わせたなら、必ずや同じ運命に遭っていたであろうと恐怖する。城中にハムレットをこのまま放置しておくことがいかに危険か、王妃の身さえ危ういぞ、と案じてみせるクロードニアスだが、第一に脅えるのは己の命であつたろう。引用文中二つの us はともに王自身を指すい

わゆる royal we の用法であるが、この王たる自身の命運こそが最大の関心事であることは疑いない。(注11) 他方、王妃ガートルードは、あれほどに恐ろしく追い詰められ、自己の内面に食い込んでくるハムレットの攻撃に怯えた戦慄さには一切触れていない。むしろ、偽りを混せて王子への情状酌量を暗に願う意図さえ窺わせる。ポーニウス殺害のとは狂気にあつて、王子自身にはないかのように。

だが、この殺傷事件は、クローディアスにとっては格好の口実となり得る。大義名分の立つ監禁、追放、処罰、何であれ王の胸ひとつで裁定を下すことができる状況が生まれたのだ。

King. Where is he gone?
 Queen. To draw apart the body he hath kill'd;
 O'er whom his very madness, like some ore
 Among a mineral of metals base,
 Shows itself pure: 'a weeps for what is done.
 King. O Gertrude, come way!
 The sun no sooner shall the mountains touch
 But we will ship him hence; and this vile deed
 We must with all our majesty and skill
 Both countenance and excuse. Ho, Guildenstern!
 (Act IV. i. ll. 23~32)

ハムレットに与える制裁を穩便に済ませてくれまいかと、そのことのみ案ずる王妃は、王子はいずこかと聞かれて、「涙を浮かべて」己の爲したことを悔いていたかのように伝える。引用文中第4行目 a mineral of metals base とは、狂気とはいえ、衝動にて人を刺し殺すなど犯すような蔑み恐るべき過ちに走る悪しき本性の比喩「一文にもならぬ似非金脈」である。その値打ちのない鉱脈も稀に含有する純粋な価値ある鉱石 ore——その ore のごとくに、わが子ハムレットは涙した、悔いの涙を偽りなき涙を見せた、と母は訴える。無論、偽りである。確かに、第三幕第四場の終わり、「この男には申し訳なく思っている」といった類の言葉を口にする。その言葉自体に偽りはあるまい。だが同時に、老臣の死も、自己の行為も、天の配剤と感じていること(現に、Heaven hath pleas'd it so, / To punish me with this, and this with me, / That I must be their scourge and minister. と言う: Act III. iv. ll. 178~180) に注目する必要がある。そして、殺害直後の情け容赦のない言葉、また、亡骸を引いて退出する際の皮肉めいた言葉も見逃してはならない。涙して悔いた行為では決してなかったはずである。この行為がもたらす己の定めは逃げも隠れもせぬ、淡々と受け入れる。それこそが、ハムレットの偽りなき心情であつたろう—— ‘----will answer well / The death I gave him.’ (ll. 181~182)

それは、母も確かに聴いた。それでも、いやそうであるからこそ、敢えて涙し悔いていたと現王には伝えねばならなかった。王子の、わが子の命がかかっているのだ。第一幕第二場、上辺の和解はなつたとしても、敵対し、暗に不信を交わす義父子であることは、さすがのガートルードの目にも明白であつたはず。この一大事(殺傷事件)は王子の立場を一挙に押し下げ、危機的苦境に陥らせることは陽の目を見るより確かな事実。王の絶対権は国是として「狂気」を排除することを許すであろう。嘘の証言より手立てはないのである、王子を救い得るのは。しかし、クローディアスの耳には王妃の秘かな願いも、ましてかの言葉 ‘a weeps for what is

done. (l. 27) など届く望みはない。

我が身の危険に加えて、デンマーク国の乱れ、恥辱として国内外にこの一件にまつわる噂の広まることをも恐れたクロードィアスは、即刻の国外追放の命を下す。まずは、悪阻しき遺体を捜し出し、当人の在りかを突き止めて事を断行せねばならない。王妃ガートルードの弁明（わが子に代わる）にはまったく意を払わず、王自身の名誉 our name をのみ大事とする本心がその言葉に露呈する。その迅速さには目を見張るものがある。

やがて、ハムレットは叔父王の前に引き出されて尋問を受け、時をおかず英国に向かう船上の人となる。そして王の筋書きに従えば、供に従った例の学友二人に託された親書によって、英国の地に降り立つや否や、死を賜る手はずになっていたのである。こうして、手元に置く願いどころか、その身柄の保障さえも危うい成り行きに王妃が落胆したことは疑いない。そしてこの後、劇中での登場は、第四幕第五場、オフィーリア狂乱の場まで無い。そして、彼女が劇の展開していく上で重要な役割を果たすのは、さらに第四幕第七場まで待たねばならない。

第四幕第七場とは、世に知られた「オフィーリア溺死の場」である。そして、すでに紹介したことであるが、王妃ガートルードに与えられるのは、独り語りによる（独白ではない）一幅の絵のごとき美の瞬間を描くことであった。ここでは、その描写を特に引用解説することはしない。主眼点がそこにはないためである。（注12）ただ、第五幕第一場、オフィーリア埋葬の場面と合わせ考えるなら、溺死の場面描写にも、単に語り役としてのガートルードのみを見るのではなく、別の一面を見ることが可能であろう。それは、王子の母としての視点、求愛者に遭遇し、慈しみの愛を掲げられることを至福とした女の視点が言葉に託されているとしたならば、そこに一貫したものを見出すことができようか。

さて、こうしてガートルードは、第四幕以降、重要な局面においては、先の第四幕第一場冒頭に見られるように、ハムレットに知られざる場面において「母」の顔を前面に出し、己が幸に先んじて、腹を痛めたわが子の安寧を祈り、でき得ることを為して待つ母を演じることになる。ただし、ハムレットからあれほどに「美德」に倅る生き様と咎められ、義弟王を遠ざけよとの、あの願いと諫言を入れた風はない。おそらく、王妃に寄せる王の執着は王冠と王国への執着と絡まって、前にも増して強まる分とも変わる恐れはあるまい。かつ、王妃の王に対する執着も根本のところで変わることはなかったであろう。己を今更に持して先夫、わが子によって信頼された「美德の鑑」に立ち返る人ではあるまい。故にこそ、現王クロードィアスが執着を深め得るのである。そうした限界はあったとして、ガートルードの「母」の一面は第五幕第二場終幕に至るまで失われることはない。疑いなく、その母たる暗然の力を終盤においても垣間見せるのである。（注13）

第五幕第一場、秘かに仕組まれた暗殺の手を逃れて帰国したハムレットが、腹心の友ホレイショウとともに出くわした、ある葬送の列。それは溺死したオフィーリアの亡骸を埋葬するべく歩を進める一行であった。王と王妃の姿をそこに見出して、疎かならぬ身分にあるものの埋葬と推察するが、よもやオフィーリアのものとは知る由もない。しかも、フランスより急遽帰国した（父ポローニアスの急死の知らせ）と思われるレアーティーズの姿もある。僧侶の祈りの言葉から、その死者がかの乙女であることを知って驚愕する。今まさに棺が墓穴に埋められようとしたそのとき、兄レアーティーズは惜別の情を大いなる声にて吐露するが、その大仰さに刺激されたか、俄かにハムレットが物陰から踊り出で、兄の愛に挑むのである。「兄の愛な

ど何ものぞ、我こそは、世にあつて最大にして最も深き誠の愛を捧げし者」というわけである。

当然の如く、この両者激しく揉み合うことになるが、引き離され、母ガートルードも必死の仲裁を試みる。そこに、もうひとつの嘘とわが子弁護の言葉を聴くことができる。

Hamlet. Why, I will fight with him upon this theme
Until my eyelids will no longer wag.
Queen. O my son, what theme?
Hamlet. I lov'd Ophelia: forty thousand brothers
Could not, with all their quantity of love,
Make up my sum. What wilt thou do for her?
King. O, he is mad, Laertes.
Queen. For love of God, forbear him.

(Act V. i. ll. 261~268)

引用文中の第1行目 this theme とは、どれほどオフィーリアを愛していたか、その愛を指す。実兄などたとえ4千人揃って対抗したところでこの自分の愛に敵うものか。ハムレットは命を賭して競う覚悟である。国王がまず制する。「あれは狂っておるのだ、レアーティーズ」すなわち、常軌を逸した狂人故、相手にするなど制したのである。この言葉は王妃の救いになった。

「狂気」は、血を見るやも知れぬ争いを避ける口実となってくれよう。

王妃の言葉、末行にある‘him’とはハムレットのことであり、‘forbear him’と懇願するのは、正常な精神を忘れた王子である故、あの子の言うことなど真に受けず、ここは寛大に、心外であろうけれども、堪えて許してやってくれとの意である。しかし、よく考えれば、王妃はすでに王子が狂人ではないという重大な事実を知っているのであり、‘he is mad’という王の言葉が事実を伝える言葉と思って聞くわけではない。ただ、直感的にその言葉を利用し口実としたに過ぎない。王は単に、王位継承者に定めた男（王子）による更なる不祥事を恐れたのであり、国情が脅かされることを嫌って二人を制したに過ぎまい。他方、王妃は母としてわが子の非を暗に詫び、起こりうる禍から守る本能を働かせて制止するのである。

だが、その母の思いをどこまで察したものか、当のハムレットは更に挑戦的、かつ挑発的な言葉を10行ほども口にして己が愛の証を立て、むしろ相手に喧嘩を吹っかけ、刀を抜かせる勢いである。たまらず母は再度、これもすべて狂気のせい、真に受けぬようにとレアーティーズの説得にかかる。

Queen. This is mere madness;
And thus awhile the fit will on him;
Anon, as patient as the female dove
When that her golden couplets are disclos'd,
His silence will sit drooping.

(Act V. i. ll. 279-283)

正気ではないのです。そのせいに過ぎません。とガートルードは再度、王子の挑発が狂気の言わせた言葉に過ぎぬ mere madness (l. 279) 故、相手にせぬよう説こうとする。若者（レアーティーズ）が激情に駆られて、王子に向かって刃を抜くことなど何としても避けねばなら

ない。注目すべきは、次行以下の言葉である。ほんのしばらく待てば収まる発作に過ぎぬ、と言うのである。雌鳩の譬えは別として、常軌を逸したかに見える言動は、束の間のこと、「発作」さえ収まれば嘘のように鎮まるというこの弁明——当事者に代わる釈明、どこやら聞き覚えのある釈明である。「発作」にすべての責を負わせ、しかもすぐに過ぎ去り、正常に復すと説くこの釈明は、マクベス夫人のものでもある。(注14) 夫人の場合は、夫マクベスの危機を救おうと咄嗟に口をついて出た苦し紛れの釈明であったが、母であるガートルードは、わが子のためにこの fit なる言葉を用いたのである。そして、いずれの場合にも、この必死の釈明を試みる当人も然り、彼女らを取り囲む者のすべてがこの説得を力あるものとして聞いていたわけではなかった。それでも結果として大事には至らず、その場を収める力とはなり得るのである。そこに、母として、妻として愛注ぐものへの情の発露を見ぬわけにはいくまい。

さて、場面は変わって第五幕第二場、劇も終盤に向かう。叔父王によってハムレットとレアーティーズの二人を闘わせる御前試合が計画される。ハムレットはなにやら胸騒ぎを覚えるものの、天命に従う心境にてこの命に従うことにする。この御前試合、始まる前から陰謀が仕組まれており、王の野心に唆されたレアーティーズは、毒をもってこの闘いの必勝を謀る。それはいわば暗殺に等しかったが、国王クロードィアスは油断のならぬ策士である。必勝の保証として毒を二重に仕掛ける、ひとつは刀に、いまひとつは酒（ワイン）に。レアーティーズに告げられるのは、刀の毒のみである。王妃には、言うまでもなく極秘の策謀である。

この御前試合におそらくは何の疑いなく臨む王妃は、ここにも母の顔を迷いなく表わす。御前に向かう前、伝言がハムレットの下に届けられる。王妃からのものであった。

Lord. The King and Queen and all are coming down.
Hamlet. In happy time.
Lord. The Queen desires you to use some gentle entertainment
to Laertes before you fall to play.
Hamlet. She well instructs me. [Exit Lord.]
Horatio. You will lose this wager, my lord.
Hamlet. I do not think so; since he went into France I
have been in continual practice. I shall win at the odds.
But thou wouldst not think how ill all's here about my
heart; but it is no matter.

(Act V. ii. ll. 196~205)

「刀を交えて闘いを始める前に、対戦者レアーティーズに対して、貴人であり、宮廷人の礼をわきまえた態度を示して欲しいとのことでございます。」王妃のたつての望みとして伝えられるこの伝言。引用文第3行目 gentle entertainment にその願いのすべてが籠められる。ハムレットは即答する。「(王妃は) よきお教えを下された」ここでも、我々は、ある種の従順さ、素直さを、その迷いのなさで簡単簡潔な言葉に見る。そこには、第一幕第二場、母の願いに応じて、ウィッテンベルク大学には戻らぬと決めるその瞬間の素直さに通ずるものがある。

そして、She well instructs me と応えるとき、この王妃であって母である人の願いに恥じぬよう振舞うことを自らにも言い聞かせたに違いない。思い起こせば、御前試合の決定に先立つ墓場の場面にて、叔父王のあの言葉、‘O, he is mad, Laertes.’ (Act V. i. l. 267) それが咄嗟

の言葉であるならば、そう言わしめたものは、第四幕第一場冒頭の母の証言——madness にて老臣を刺すなり——あの証言ではなかったか。その関連性は十分に考えられた。その場に居合わせたわけではなかったが、後、叔父王の he is mad と言うのを耳にするハムレットは、母を信じたのでなかったか。母は第三幕第四場において自ら約した通り、王には、居室の場での対話のすべてを明かしたりはせぬと誓った。その言葉を欺く、偽誓行為に墮すことはなかったと信じたのではなかったか。この母の命に服すべく、第五幕第二場、御前試合に臨んだハムレットはレアーティーズを前に、潔く己が非を非として認め、和解を可能ならしめる。ただ哀しき哉、それは企みを押し隠した和解の唱和であった。レアーティーズには、もはや引き返す道は断たれていたものであり、必勝を毒刃に託した闘いを完遂するよりない。

さて、母の願いに応じてくれたわが子に満足を感じた王妃は、隠しきれぬ喜びを湛えて玉座よりその勇姿に視線を注いだことであろう。他方、試合が始まってさほどの時間も経過せぬものの、王クロードiasはハムレットに杯を勧める。無論、かねて用意した毒杯である。

King. Stay, give me drink. Hamlet, this pearl is thine;
Here's to thy health. [Drum, trumpets, and shot.
Give him the cup.
Hamlet. I'll play this bout first; set it by awhile.
Come. [They play.
Another hit; what say you?
Laertes. A touch, a touch, I do confess't
(Act V. ii. ll. 278~283)

早く決着をつけたいのか、国王はしきりに酒盃を取らせようとする。自身も杯をあおって疑心を削ぐことも忘れてはいない。もっとも、王子の方は勝負へのこだわりが強く、この場は、まずは一勝負すませてからと断る。すると、今度はわたくしが、と言わんばかりに母ガートルードがハムレットの気を引く。

King. Our son shall win.
Queen. He's fat, and scant of breath.
Here, Hamlet, take my napkin, rub thy brows.
The Queen carouses to thy fortune, Hamlet.
Hamlet. Good madam.
King. Gertrude, do not drink.
Queen. I will, my lord; I pray you pardon me.
(Act V. ii. ll. 284~290)

この白々しい言葉「我らが息子、王子が必ずや勝つであろう」それは、傍らの王妃に媚びかつ欺く言葉、自らの暗き企みを糊塗する虚言である。毒をもってして、必ずや命奪ってやると臨んだ御前試合のはずであった。それと知らぬ王妃にとって、‘Our son shall win’ と確約する王の言葉を聞くまでもなく、軍配の行方は決していた。だが、貴人にして武人、その名にふさわしき態度をみせたわが子の雄雄しき闘いぶり、鍛錬の賜物たる剣さばき、その先に敗者の

姿などあろうはずもない。母は、汗ばむわが子にハンカチを手渡そうとする「さあ、わたくしのハンカチを。額をお拭きなさい」

ところが、驚いたことにその直後、あの毒杯、王が用意周到に仕組んだ暗殺の小道具、ハムレット自身は先刻辞した、あの酒盃を王妃自ら仰ぐというのである。それも、愛しいわが子の勝利と安寧を祈って！ 未だ、勝敗が決する前に、栄えある未来を祝して王妃自ら杯をあおると。‘The Queen carouses to thy fortune, Hamlet.’——現に待ち構えている未来とは、死、それも先夫、そして父と同じ毒殺、に他ならぬというに。

王クローディアスが制する暇（いとま）なく、ガートルードは「お赦しを」とその制止を振り払うかのように酒杯（毒杯）を飲み干す。それが母の愛の証（しるし）でもあるかのように。異変はすぐには現れない。若者二人の闘いは続けられ、激しい鏝迫り合いとなって互いに一矢報いたか、両者血を流す。ままよ、もう一本、となお試合続行を望むハムレット。と、そのとき、王妃が倒れる。真っ先に気付くのは軍配役のオズリックであるが、王こそは、秘かにその瞬間を予知し恐れていたはずである。

Hamlet. How does the Queen?
King. She swoons to see them bleed.
Queen. No, no, the drink, the drink! O my dear
Hamlet!
The drink,! the drink! I am poison'd. [Dies.
Hamlet. O, villainy! Ho! Let the door be lock'd.
Treachery! seek it out. [Laertes falls.
(Act V. ii. ll. 309~314)

ハムレットは、オズリックの声に異変を感じて、王妃の身を案じて目をやる。ところが、王クローディアスは素知らぬ顔で「二人の流す血を見て気を失ったのだ。」と応える！ 毒の効き目に意識の遠ざかる中、王妃は僅かな言葉で謀られたことを必死に告げる。「酒、酒、あの酒です！」わが身はもはや失われた、だが、王がハムレットを謀ろうとしたことは明々白々。この恐ろしき謀略を教えねば。息絶える直前「毒を盛られたのです！」と母は dear Hamlet に訴え、果てる。

ハムレットは叫ぶ、villainy! まさに度し難き悪党であった。野心のために実兄を謀り、義姉かつ王妃を誑かして王国を手にしたこの男、今度は、その野心と保身のために甥かつ義子を亡き者にせんとす。狙いが逸れたと知るや、女への執着を放擲し嘘を吐く。覆い隠せぬ罪をも糊塗する目論見である。その目論見、動物的嗅覚にて嗅ぎ当てた逃げ道か？ だが、ハムレットの前にそのような姑息な方便が通用するはずもない。

この直後、王はハムレットの刃に倒れて天罰を報われることになるが、救いのないのは、ガートルードであったろう。遠のく意識のうちに甦ったのは、わが子ハムレットのあの断罪の声ではなかったか。第三幕第四幕、‘A murderer and a villain!/ A slave.....; a vice of kings;/ A cutpurse of the empire and the rule’——嗚呼、それは比喩ではなかったのだ！ その言葉通りの男を言い当てたもの、まさしく murderer であり、villain であった。そうでなくして、あれほどに熱情をもって求愛し、その愛に耽溺したかに見えた男がこの王妃たる自分を欺こうはずはない。このわたくしが愛してやまぬ王子を dear Hamlet に毒を盛ろうなど考えようはず

はない。「血を見て気を失った」など、冷血な言葉を口にするなどあり得ぬ。だが、なんと悲しく、何と酷い真実であろうか。そして救いのない命の終焉であろうか。

薄らぐ意識に映るは、果たして、非業の死を遂げた先夫、先王の姿か。永久の愛を誓った言葉であつたろうか。聞こえてくるのは、一夜、また一夜と耐えて御覧なさい、と説き諫めたハムレットの言葉であつたろうか。それは、真に子としての virtue の語らせた言葉であつた。死の間際に王妃ガートルードに訪れた啓示は、実に残酷であつた。第三幕第四場のハムレットの言葉が真実を語る言葉であつたに関わらず、その真実の声を聞き分けることができなかった。毒を盛られ、その毒の麻痺に縛られてこそ、その言葉の真実に至つたのである。何よりも無念は、第二の王・第二の夫は愛の仮面を楯に murderer そして villainy の顔を覆い隠していた！——この事実を見抜く力を持たぬことであつた。見抜くべき眼を曇らせたものが、己が自身のなかにも巣食っていたのか？ それが脆さであるとすれば、その脆きものを見据える機を逸したことにこの滅びの因があるのやもしれぬ。嗚呼、そはまさしく、Frailty, thy name is woman の証なり。

わが子ハムレットにハンカチを差し出したときの誇らしく満たされた思い、いや、あたかも満たされるかに見えた母の愛は、こうして一瞬にして突き崩され、王妃ガートルードの命／生は哀しくも憐れなる最期を迎えることになるのである。

注

1. この‘nothing’については、大修館注釈書の解釈を参考とした。すなわち、no thing——殿方のような「一物」など between maid's legs には持ち合わせませぬ、との意を含む言葉として故意に取って、ハムレットは、それは殊勝だとからかうのである。但し、当のオフィーリアにはそれが更に加わった猥雑な語とは伝わらず、‘What is my lord?’との応答となる。尤も、それと知っていて、わざととぼけたと解することも可能である。
2. show なる語には shoe、すなわち女性の恥部の意味をも指したという。大修館シェイクスピア双書『ハムレット』、p235。オフィーリアの清純さという点に関しては、根本のところは変わらぬとして、こうした劇中のある種の卑猥な言葉に対してみせる反応は、単純な人物観を疑わせるに十分であろう。また、ハムレットとの性的な関わりについても議論が分かれる要因となるものと思われる。
3. ハムレットが語らぬままに、少なくともオフィーリア自身に確信させるに足りる方法では語らぬままに、恋あるいは愛よりも大義を優先させたことは否めまい。そしてそのことは、やがて彼女の狂気に深く関わっていくことも想像に難くない。
拙論「ハムレットはオフィーリアを愛したか」においてこの問題を扱った。『広島文教女子大学紀要』第41号および第42号（2006年～2007年）
4. ハムレットはすでに第三幕第二場冒頭、旅役者による芝居がまだ始まらぬうちのことだが、旅役者を相手にto hold, as 'twere, the mirror up to nature ; to show virtue her own feature, scorn her own image,..... (ll. 20~22) と、ある種の演劇観を口にしているが、この言葉とここ、第三幕第四場、居室の場において母に掲げる鏡の意味はぴったりと一致する。まさに、鏡に映し出される「美德／virtue」の実態を映し出そうとする——I set you up a glass——のであるから。
5. 中世以来、キリスト教世界において、女にとって唯一絶対とされる美德とは、貞節であり、をれは、chastity, modesty, そして多くの場合、単に virtue なる、通常であれば漠然とした抽象的な概念しか呼び起こさない語を用いて表わされた。その理由は、女に求められる美德なるものが、唯ひとつ、この貞節という名の美德であつたからに他ならない。そして、男には、身分の差に関わりなく、この厳密さは求められることはない。
6. ギリシア神話の神々の呼称については、ギリシア名を用いた。したがって、英文学の中での英語表記と一致しない結果となっている。この点をお断りしておく。
7. 引用文には、Folio 版では削除されている箇所を [] の表記で一部加えてある。削除部分を加味すれば、理性・分別の喪失がいかに人をして狂わせるかという点、そして、ハムレットの「女」に対し

- て抱く不可解さと解けぬ謎の深さを強める上で、なんらか意味が加わるかもしれない。
8. 第一幕第五場における父王・幽霊の言葉を指す。すなわち、‘Taint not thy mind, nor let thy soul contrive/Against thy mother aught’ (Act I. v. ll. 85-86) というあの言葉である。
 9. 注7と同様、引用文には、Folio 版では削除された箇所を加えてある。習慣が人を変える様、ここではよき変化であるが、その点を強調するための反復であろう。但し、少しくどい印象があり、参考に留めればよいと思う。
 10. ここでも、引用文には、Folio 版で削除された箇所を〔 〕の表記で示してある。ただ、今回は、同じ参考でも、この箇所を加えるか割るかによって、その後の展開も、解釈も大いに違いをもたらすため、その意味での参考資料として引用に加えた。ただし、この小論では、削除した Folio 版の原稿（台本）に沿ってこの場を考えることとした。理由は本文に触れておいた。
 11. 王位に在るものが、人称代名詞 we; our; us を用いる例を指して ‘royal we’ と呼ぶことはよく知られているが、その意図は、一国を代表し、国権を担うものとしての威厳、絶対権を象徴・誇示することにあると解されている。クローディアスは、この危機に際して、それを常以上に強く感じている。
 12. オフィーリア溺死の場面描写については、今回は解説はしないが、一部だけでも引用を挙げて紹介に代えたい。
 13. 第一幕第二場、母の僅か1～2行の言葉に説得されてデンマークに留まることを受容するハムレットであった。（すでに本文で触れた）このことを思い起こすとき、その唐突さは不可解でもあるが、母というものの、母の発する言葉に説明のつかない暗然たる説得力を感じさせる。ここで、「またしても」といったのはそこに因がある。
 14. 悲劇『マクベス』第三幕第四場、王位に就いたマクベスの秘密を知る武将バンクォーが、酒宴の席に幽霊となって現れる。但し、マクベスの目にのみ映る幽霊である。刺客を放って葬ったはずの男の影（幽霊）に脅える夫に代わって、その場を取り繕うマクベス夫人が弁明に用いる言葉が、この ‘fit’ なる語である。しかも、若い頃よりしばしば起こること、「すぐにも収まる故大事ない」と居並ぶ貴族家臣の不信を解こうとするが、その点も似通っている。
- 執筆時期は、四大悲劇の最後の作品といわれる『マクベス』の方が後であり、従って『ハムレット』に似通った描き方を再度用いたということになるうか。

尚、本文中の英語引用は、すべてウィリアム・シェイクスピア作、高橋康成、河合祥一郎編注、『ハムレット』大修館シェイクスピア双書、大修館書店、2001年刊より引いたものである。

参 考 文 献

1. ウィリアム・シェイクスピア作、高橋康成、河合祥一郎編注、『ハムレット』大修館シェイクスピア双書、大修館書店、2001年。
2. ウィリアム・シェイクスピア作、市川三喜、嶺卓三注釈、HAMLET 研究社詳注シェイクスピア叢書、研究社、1993年（初版：1963年）
3. William Shakespeare, ed. by Harold Jenkins *HAMLET, The Arden Edition of the Works of William Shakespeare*, METHUEN, London and New York, reprinted in 1986, first printed in 1982.
4. William Shakespeare, ed. by Philip Edwards *HAMLET-Prince of Denmark, The New Cambridge Shakespeare*, Cambridge University Press, 1988, first published in 1985.
5. 中西新太郎著、『シェイクスピアの世界』英宝社、1967年。
6. 斉藤勇著、『斉藤勇著作集』第三卷、研究社、1978年。（初版：1975年）
7. 青山誠子著、『シェイクスピアの女たち』、研究社選書17、研究社、1984年。（初版：1981年）
8. アーネスト・ジョーンズ著、栗原裕訳、『ハムレットとオイディプス』、大修館書店、1988年。
9. 河合祥一郎著、『ハムレット太っていた！』白水社、2001年。
10. ウィリアム・シェイクスピア作、小田島雄志訳、『ハムレット』、『シェイクスピア全集』第三巻より、白水社、1998年。（初版：1986年）
11. ジョン・アップダイク作、河合祥一郎訳、『ガートルードとクローディアス』、白水社、2002年。
12. 福田恒存監修、『シェイクスピア・ハンドブック』三省堂、1987年。
13. 丹羽隆子著、『ギリシア神話－西欧文化の源流へー』大修館書店、2004年。（初版：1985年）
14. 呉茂著、『ギリシア神話』（新装版）新潮社、2004年。（初版：1994年）
15. マイケル・グラント、ジョン・ヘイゼル共著、西田実他訳、『ギリシア・ローマ神話事典』1990年（初版1988年）

—平成21年10月29日 受理—